

第3問

次の文章は『源氏物語』「幻」巻の一節で、光源氏が最愛の妻である紫の上に先立たれて寂しく過ごしているところに、息子である大将の君が見舞いに訪れた場面である。これを読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点 50）

五月雨さみだれはいとどながめ暮らし給たまふよりほかのことなく、ア さうさうしきに、十余日よの月はなやかにさし出いでたる雲間くもまのめづらしきに、大将注1の君、御前にさぶらひ給ふ。花橘はなたちばなの月影にいときはやかに見ゆる、かをりも追ひ風なつかしければ、イ 千代注2を駟なせる声もせなむ」と待たるるほどに、にはかに立ち出づるむら雲のけしきいとイ あやにくにて、いとおどろおどろしう降りくる雨に添そひて、さと吹く風に灯籠とうろうも吹きまどはして空暗くき心地するに、ウ 窓注3を打つ声など、めづらしからぬ古言ふることばをうち誦すじ給へるも、折をからにや、妹いもが垣根かきねにおとなはせまほしき御声なり。

「ひとり住みは、ことに変はることなけれど、あやしうさうさうしくこそありけれ。深き山住みせむにも、かくて身を駟そらはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」などのたまひて、「女房、ここにくだものなどまゐらせよ。男をとこども召よさむもことごとしきほどなり」などのたまふ。心にはただ空注5をながめ給ふ御気色の、尽つきせず心苦しければ、「かくのみ思おぼし紛まれずは、御行みゆきひにも心澄まし給はむことかたくや」と、見たてまつり給ふ。「ほのかに見し御面影みおもかげだに忘れがたし。A ましてことわりぞかし」と思おもひる給へり。

「昨日きのふ今日けふと思おもひ給ふるほどに、御果みまてもやうやう近ちかうなり侍りにけり。いかやうにか掟おきてて思おもし召よすらむ」と申し給へば、「何ばかり世の常ならぬ事をかはものせむ。かの心ざしおかれたる極楽注8の曼陀羅まんだらなど、このたびなむ供養くやうすべき。経きやうなどもあまたありけるを、なにがし僧都そうづ、皆その心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従したがひてなむものすべき」などのたまふ。「かやうの事、もとよりとりたてて思おもし掟おきててけるは、ウ うしろやすきわざなれど、この世にはかりそめの御契みせがひなりけりと見え給ふには、形見かたみといふばかり留め聞こえ給へる人だにもし給はぬこそ、口惜くししう侍れ」と申し給へば、B 「それは、仮かりならず命長いのちながき人々にも、さやうなる事のおほかた少なかりける、みづからの口惜くししさにこそ。そこにこそは

門は広げ給はめ」などのたまふ。

何事につけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて、過ぎにし事いたうものたまひ出でぬに、待たれつる山ほととぎすのほのかにうち鳴きたるも、「いかに知りてか」と、聞く人、ただならず、

X 亡き人をしのぶる宵の村雨に濡れてや来つる山ほととぎす
とて、いとど空をながめ給ふ。大将、

Y ほととぎす君に伝てなむふるさとの花橘は今ぞ盛りと

(注) 1 大将の君——光源氏の息子で、母は亡き葵の上。紫の上と対面したことはない。

2 千代を駟らせる声——「色かへぬ花橘にほととぎす千代を駟らせる声聞こゆなり」(『後撰和歌集』・夏) による表現。

3 窓を打つ声——「秋の夜長し 夜長くして眠ることなければ天も明けず 歌々たる残んの燈の壁に背けたる影 蕭々たる暗き雨の窓を打つ声」(『和漢朗詠集』秋・秋夜・白居易) の一節。

4 妹が垣根——ここでは、紫の上がいる所のこと。

5 ただ空をながめ給ふ御気色——「大空は恋しき人の形見かはもの思ふことにながめらるらむ」(『古今和歌集』・恋) による表現。

6 ほのかに見し御面影——かつて大将の君がわずかに見た紫の上の面影。

7 御果て——ここでは、紫の上の一周忌のこと。

8 極楽の曼陀羅——極楽浄土の荘嚴なさまを表した絵図。生前、紫の上が作らせていた。

9 経——ここでは、紫の上が写させた經典。

10 この世にはかりそめの御契りなりけりと見え給ふ——ここでは、紫の上が現世との縁が薄かったと思われる、ということ。
11 形見といふばかり留め聞こえ給へる人だにものし給はぬ——紫の上に子どもがいなかったことを言う。

12 いかに知りてか——「いにしへのこと語らへばほととぎすいかに知りてか古声のする」(『古今和歌六帖』五) による表現。

第2回

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア) さうざうしきに

- 21
- ① 落ち着かないが
 - ② やかましいが
 - ③ もの寂しいが
 - ④ しめやかだが
 - ⑤ 退屈だが

(イ) あやにくにて

- 22
- ① 間が悪くて
 - ② 不思議で
 - ③ 突然で
 - ④ 激しくて
 - ⑤ 何気なくて

(ウ) うしろやすき

- 23
- ① 気の早い
 - ② 安心な
 - ③ 容易な
 - ④ 気がかりな
 - ⑤ 不吉な

問2 傍線部A「ましてことわりぞかし」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

24。

- ① 光源氏が、いつまでも紫の上のことを忘れられず、亡き人の形見だと言って空を見上げるばかりで、何をすることもなくひたすら自邸に籠っているのは情けないということ。
- ② 大将の君でさえ悲嘆に暮れているのだから、光源氏が最愛の紫の上を失った悲しみに耐えられず、紫の上の後を追って死ぬことばかり考えてしまうのも道理であるということ。
- ③ 一周忌を迎えても、光源氏はいいかわらず紫の上の死を嘆いて茫然と過ぼろぜんごしており、仏道修行にも差し支える様子なので、このままでは光源氏の来世のことが気がかりだということ。
- ④ 光源氏にとって紫の上はかけがえのない存在だったので、その姿を垣間見たにすぎない大将の君よりもはるかに紫の上を追慕し、その死を深く嘆き続けているのも当然だということ。
- ⑤ 大将の君は紫の上の面影が忘れられず、思い出に浸ってばかりいるが、それと比べると、光源氏が亡き紫の上への執着を断って仏道修行に専念しようとしているのは立派だということ。

問3

この文章の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 大将の君が光源氏のもとを訪問した夜は、五月雨が降り続く季節にしてはめずらしく、一晚中月が明るく輝いていた。
- ② 光源氏が紫の上を思つて古詩を朗詠する声は、亡き紫の上の耳にも届いただろうと思われるほど、哀切を極めていた。
- ③ 光源氏は、夜も更けたので、大将の君だけでなく、その従者たちにも食べ物などをふるまうように女房たちに命じた。
- ④ 紫の上は、自分の亡き後も光源氏が平穩に過ごせるよう仏に祈り、その気持ちを僧都を通じて大将の君に伝えていた。
- ⑤ 光源氏は、紫の上の一周忌の供養を、僧都の指示を仰ぎつつ、あまり特別なものにならないようにするつもりだった。

問4

傍線部B

「それは、仮ならず命長き人々にも、さやうなる事のおほかた少なかりける、みづからの口惜しさにこそ。そこ
にこそは門は広げ給はめ」の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26

- ① 「それ」は、紫の上が幸せに暮らしていたことを指している。
- ② 「仮ならず命長き人々」は、光源氏と深く関わった女たちの中で長命を保っている人のことである。
- ③ 「さやうなる事」は、光源氏の子をもうけることを指している。
- ④ 「みづからの口惜しさにこそ」は、自分自身のありさまをふり返って残念に思う光源氏の気持ちを表している。
- ⑤ 「そこにこそは門は広げ給はめ」は、大将の君の子孫が栄えることを光源氏が望むということである。

問5 ほととぎすは、初夏に日本に飛来する渡り鳥だが、和歌では、冥界に通う鳥として詠まれることがある。次に示すのは、

この文章を読んだ六人の生徒が、その知識を踏まえ、**X・Y**の歌を含む本文中の「ほととぎす」について話し合っている場面である。発言①、⑥のうち適当なものを二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

27

28

① 生徒A——本文の「千代を駟らせる声」は、(注2)で「色かへぬ……」の歌による表現だという説明があるよね。

その歌からすると、この声はほととぎすの声なんだね。そして、このほととぎすの声には光源氏の声の意も込められているんじゃないかな。それも踏まえて、光源氏が「窓を打つ声」と古詩を朗詠する場面が書かれているんだよ。

② 生徒B——そうかなあ。「千代を駟らせる声」には、光源氏の声の意味はないと思うよ。本文では、五月雨の時期に風に乗って香る橘の花に心ひかれる様子が書かれているよね。「千代を駟らせる声もせなむ」は、橘の花が香る季節に聞けるはずのほととぎすの声が少しもしないのは、近頃曇り空が続いているせいだと、空を見て嘆いているんだよ。

③ 生徒C——「千代を駟らせる声」はBさんの言うとおり単にほととぎすの声だろうけれど、ここは、ほととぎすの声を聞きたいと思って待つ気持ちを表していて、その思いが、最終段落1行目の「待たれつる山ほととぎす」という表現に結びつくんだよ。そして、その声が聞こえた時に、「古声のする」とある(注12)の歌が思い出されるんだ。

④ 生徒D——なるほど。待っていたほととぎすが鳴いたから、自分たちの思いを察してくれたようだ、その場の人が感じたんだね。そして、亡き紫の上を思っている時に声が聞こえたので、直後の**X**の歌で光源氏は、「亡き人」である紫の上が「ほととぎす」になって冥界から戻って来たと、詠んでいるんだね。

⑤ 生徒E——いや、**X**の歌の「ほととぎす」は、あの世からの使者と考えたほうがいいと思うよ。この歌では、光源氏が亡き紫の上を思い出している時にほととぎすが鳴いた状況を詠んでいるわけだけど、これに応じて大将の君が詠んだ**Y**の歌に、「君に伝てなむ」と、ほととぎすに伝言を託すような表現があるからね。

⑥

生徒F——そうか。ほととぎすはあの世からの使者だから、Yの歌の「君に伝てなむ」は、紫の上から光源氏への「あなたがいるなつかしい故郷では今頃橋の花も満開でしょうか」という伝言をほととぎすが運んでくるといふことなんだね。大将の君は、亡くなった紫の上が今も光源氏を思っていると書いて慰めているんだ。